学習院女子短期大学紀要　第30号　1992.12.25

フィレンツェ社会と青年ロレンツォ——ルネサンスの祝祭

根占献一

はじめに—研究現況

本年はロレンツォ・デ・メディチ（一四四九〜九二）没後五百年に当り、地元イタリアのフィレンツェでは彼に関する国際会議や展示会が活発に行なわれている。[1] ルネサンスに占める彼の位置は高いものがあり、これは当然の試みであろう。我が国でも、最近この一族の成し遂げた学芸後援活動が、特に企業におけるメセナのありかたをめぐる議論の中で注目されている。彼の歴史的役割を総合的に評価しようとする、この記念すべき催物は、しかしながら同国の同時代人、コロンブスの所謂新大陸発見五百年祭に隠れてしまい、「黄金の国」では何の意味も持っていないらしい。

三年前の一九八九年はまた初期メディチ一族の重要人物、ロレンツォの祖父コシモの生誕六百年目に相当した。イタリア・ルネサンスの第一線の研究者たちは、この事を忘れず、シンポジュウムを開催し、そののちに信のおける書物を出版した。執筆者の一人でルネサンス思想に関する充実した業績を出しつつあるハンキンズは、ちょうど四百年後に勃発したフランス革命—この二百年祭が日本でもかなりマスコミなどを賑わしたことは耳新しい—のために、彼

の出生を記念すべき年が、運悪く埋没してしまう巡り合わせに触れている。[2] 祖父と孫両方にとり奇妙な符合である。だが人によっては、一個人の生誕日を大事件と比較考量していると反発を感じ、反駁したくなるであろう。ハンキンズのために弁明すれば、彼にはそのような意図はない。コシモもその渦中にいた、ここフィレンツェを一大中心とするヒューマニズム運動が、中世の教育を改革し、その後の西欧市民文化の向上に大いに寄与していった歴史の発展を辿るなら、パリ革命の後世に与えた衝撃の強さにこの運動は十分に匹敵できると考えてのことである。

我が国では「祖国の父」老コシモやロレンツォ・イル・マニーフィコへの関心は、彼らが支援したルネサンス芸術やその作家たちへの興味に較べれば、問題にならないほど低い。特にロレンツォは、彼が敬意を払った三文人、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョや、同時代人で彼にやや誤解を抱いていたマキャヴェッリらと並んで、国際人に値するイタリア人である。それは彼に関する伝記の存在を知ればよく分かる。英語圏、ドイツ語圏には古典的名著が夙にあり、他の言語にも翻訳されて広く読まれた。特に英国のW・ロスコーの著書は有名である。イタリアでは、早くも同時代人のニッコロ・ヴァローリによるラテン語版（出版は一七四九年）と子のフィリッポによるイタリア語版（出版は一五六八年）の彼の伝記が現われた。[3] ヴァローリ家はロレンツォ没後の現実政治に翻弄されるが、プラトン主義の文化に関心があったことで知られており、ニッコロの兄フィリッポはフィチーノ訳プラトン全集の出版費用の面倒を見た。一次文献とも言えるこの伝記はラテン語版或いは俗語版を通して読者を獲得し、十九世紀前半ではゲーテをその一人に数えることができる。[4] なおこの文豪はロスコーからはそのロレンツォ伝を献呈されている。また近代に入ってからは十八世紀後半にA・ファブローニによってラテン語で本格的な伝記が書かれて以来、ロレンツォの母国では多くの伝記が書き続けられ、まさに汗牛充棟の観がある。なおファブローニはコシモについても伝記を物した。またフランスでは近年、純然たる伝記だけの分類には収まりにくいが、事実関係の詳細極まる追及と総合的な作品解釈の

故に、出版されたメディチ関係文献の中でも高く評価したい書が現われた。それは学者ロションの大著で、同国も亦これにより、第一級のロレンツォ研究書を持つに至ったのである。[5]

最近のロレンツォ関係文献では、十五年前から出始めた書簡集校訂版の刊行が先ず第一に指摘されるべきであろう。これが全巻揃った暁には、記念碑的な意義をもつことになろう。[6] 彼の全体像を捉えるには、詩人・文学者としての作品群も無視することは決してできない。これまで彼の選集は何度か出版され、定評あるものも幾つかあるが、最近は個々の作品がテキスト・クリティークを踏まえたうえで次々に研究され、新しい業績が生まれている。それでも重要な詩作『バルベリーノのネンチャ』(*La Nencia da Barberino*)などは厳しく対立する意見が出され、今なお彼の作かどうか決着を見ていない。一般的に彼の作品は未完成で粗削りなところがあると評されている。だがそれは書いたものをあるところで中断し、放置したということではない。寧ろ自分の創作物に折を見て手を入れ続けている。決して長くはなかった人生（奇しくも、今の私と同年齢で、ミケランジェロなら「年老いた」と評した年端ではある。尤も彼は年老いたままこの倍以上生きてしまった）が、繁忙故にこれらを不十分なままにしてしまったのか、それとも、ミケランジェロが彫刻に対しそうであったように、ある時点で作品としてできあがったものと判断してそのままにしたのか―つまり「未完成」(non finito) の問題―、解釈が別れる。[7]

さてここに発表するものは、上記の記念の年の完成を目指して書き始めたロレンツォ伝から一部を採ったものである。だがここ二、三年程は謂わば箧底にあった。記念号への責めを塞ぐために、彼の青春[8]のひとこまを描いた箇所を前後から切り取ることにした。「未完成」に終わらす気はないのだが、改めて手に取り、読んでみると不満な点が続出、手を入れざるを得なかった。

註

(1) *La Nazione speciale: Il mondo del Magnifico*, a cura di A. Schelba, Firenze, 1992, による情報に基づく。これを送る労を取られた Signora Franca Baragli に心より感謝する。また目に付いた研究書を一、二挙げておくと、*Lorenzo il Magnifico e gli spazi dell'arte*, a cura di F. Borsi, Firenze, 1991. Lorenzo de' Medici, *Studi*, a cura di G. C. Garfagnini, Firenze, 1992. この他、多数の書が公刊予定で驚ろかされる。

(2) J. Hankins, Cosimo de' Medici as a Patron of Humanistic Literature, in *Cosimo 'Il Vecchio' de' Medici*, 1389–1464. Essays in Commemoration of the 600 th Anniversary of Cosimo de' Medici's Birth. Edited by F. Ames-Lewis, with an Introduction by E. H. Gombrich, Oxford. 1992, 69–94.

(3) E. Gusberti, *Un mito del Cinquecento: Lorenzo il Magnfico*, Bologna, 1981.

(4) 私の推測の根拠は、以下の通りである。エッカーマンのゲーテとの『対話』中の「私は、来たるべき世の永続を信じる幸福を失いたくはない。それどころか、ロレンツォ・デ・メディチとともに、来世を信じない者たちは、みなこの世でも死んでいる、と言いたい」(J. P. Eckermann, *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens.* Mit einer Einführung herausgegeben von Ernst Beutler, Deutscher Taschen Verlag, München, 1976, 93) との発言が、N・ヴァローリの eum affirmabat mortuum in hoc vita esse, neque mirum, si de altera dubitaret (Nicolai Valori *Laurentii Medicei Vita*, in *Philippi Villani Liber de civitatis Florentiae famosis civibus*.....cura et studio Gustavi Camilli Galletti, Florentiae, 1867, 177) に由来する可能性に基づく。私の知る限り、ゲーテ学者はこれ迄その典拠を明らかにして来なかった。拙稿「ゲーテの不死性思想とイタリア・ルネサンス」(『近代ヨーロッパ史論集』大陽出版、一九八九年)、二六八—七〇頁参照。A. Gelli, Lorenzo de' Medici. Discorso, in *Arehivio storico italiano*, serie terza, XVII, 1873, 416–33, 特に 423.

(5) A. Rochon, *La Jeunesse de Laurent de Medicis* (1449–1478), Paris, 1963. 扱われる時代はこの幅に収っていない。二七頁に及ぶ目録にも、私から見て重要な研究書が幾つか落ちている。これより数年前に出たシャステルの著書は、ロレンツォの時代を知るには好著であり、得られる知識も多い。だがロレンツォ自体の研究書とは言い難い。A. Chastel, *Art et humanisme à Florence au temps de Laurent le Magnifique. Etude sur la Renaissance et l'Humanisme platonicien*,

Paris, 1959. 大久保康明氏によって翻訳され、八九年に出た、クルーラスの『ロレンツォ・イル・マニーフィコ』(*Laurent le Magnifique*, Paris,1982) は彼らのあとを受けたものであり、日本語で読める最も信頼の置ける伝記である。だが題名を、この国の一部の人の使用に倣って『ロレンツォ豪華王』とされたことを残念に思う。彼は決して「王」ではなかったし、イル・マニーフィコはまた「豪華」の意味を持たない。これは実は大きな問題性を内包していて、一語句の解釈に留らず、彼の時代全体の見方に関わってくる。彼の時代であれば、「大兄」程度の含意を無視できないのではないか。イル・マニーフィコと呼ばれたのは、彼だけではない。これについては、差し当たり、次の書を参照。E. Cremer, *Lorenzo de' Medici, Staatsmann Mäzen Dichter*, Frankfurt am Main, 1970, 180. Lorenzo der Prächtige とする誤りを述べている。問題は、この呼称が後世彼によって独占されるに至った経緯である。森田義之「ロレンツォ・イル・マニフィコの美術パトロネージ」(『日伊文化研究』三〇、一九九二年) 四〇頁—六八頁、は表題にあるように、パトロネージの丹念な事実報告である。その中で筆者は「既に生前から "il Magnifico" (『豪奢で寛大英邁な殿』の意) の尊称を人々から与えられ」(四一頁) たと述べた後、ロレンツォの美術各分野の支援が多岐に渡っていることを確認し、その点で「人々が敬愛の念をもって与えた『イル・マニフィコ』の呼称にまさに相応しいものであったと言える」(六三頁) としている。そのほか気付いた範囲で邦語の文献に言及すれば、有里寛司「ロレンツォ・デ・メディチ研究」(『イタリア学会誌』一〇、一九六一年) 七五頁—八五頁、は今なお有益な指針を与える。

(6) Lorenzo de' Medici, *Lettere* I—VI, Firenze, 1977-1990. これらは、一四六〇年から八二年までの書簡である。

(7) 後者の解釈は特に、*Lorenzo de' Medici. Selected Poems and Prose*, Pennsylvania State U. P., 1991 の編者であり、訳者でもある Jon Thiem が序文で主張している。

(8) 青春とか青年とかがどの範囲の年齢を指すかについては、古典に基づくべき典拠があったとは言え、正確なところははっきりしない。ただ同時代から史料を引けば、既に三十歳になっていたロレンツォは、一四七九年にアラマンノ・リヌッチーニにより若造、青二歳の意味を込めて adulescens と呼ばれている。A. Rinuccini, *Defensa de la Libertad*, Santiago, 1952, 142. 上記註 (5) のロションは一四七八年までのロレンツォを扱っているが、その著書名は『ロレンツォの青春』である。

一　雪合戦とストロッツィ一族

父が病弱であったため、メディチ一族の御曹子ロレンツォは少年の頃から年齢以上のことを要求されていた。名代として十代半ばからミラノやナポリの宮廷に出掛け、公けに外交業務を果している。確かにこのような活動は普通なことではなかったが、当時の社会では異例と看做すべきではないのではあるまいか。今日の就学年齢が階層によってはあの頃では仕事の見習期間の始まりであり、市民会議（パルラメント）に出席できる資格が十四歳であることを考えれば、一種の外交官としてその年代で姿を見せたことは異常とは思えないし、それに彼には必ず優秀な補佐がついていた。

他方私的には一人の若者として、権勢を誇る一統の者なら等しく経験するところのものを十分に満喫し、享受した。十歳で騎馬に跨がりながら通りを練り歩くロレンツォが見られた。これはアルメッジェリーア（armeggeria）と言われ、武者姿の出て立ちによるひろめ式はこの町の伝統行事となっていた。各種の祭にはこのような威風堂々たる厳粛な場面のほかに、馬鹿騒ぎも欠けていなかったであろう。また彼はスポーツマンであり、かなりの大きさの空気入り球を使って行なわれる、パッローネは特に得意とするところだった。この球技は大変人気があったらしく、父親のピエロも仕事を忘れる位であったと言われている。郊外では野の空気を胸一杯吸いながら、友人や弟ジュリアーノと水浴びや魚釣り、馬での遠出や鷹狩りに打ち興じた。この狩猟については短詩「山鵜狩り」（*Uccellagione di starne*）がその様子を生き生きと描いている。

メディチ家をはじめとするフィレンツェの有力一門が保有する山荘に集っては、ヒューマニストと同様に高尚な、または真剣な話を語り合うことが時にはあっても、大方はうわさ話や取り留めもない話に終始し、高笑いしたことで

あろう。ロレンツォあてに出された、若者の手紙が残っている。そのような仲間の一人、ブラッチョ・マルテッリが書いた、ミラノにいる彼あての手紙は、一四六五年四月二七日付けである。その時ロレンツォは外交団の一人としてそこにいた。これにより彼らの生活ぶりが偲ばれる。露見することを恐れてか、或いはそうすること自体を楽しむためにか、仲間の者を番号や略称にして情報を流している。その中には後述の新婚夫婦を巡るあけすけな性表現も見出される。彼ら（この中には女性も既婚者も含まれる）は「陽気な仲間」(gaia brigata) を形成する。それは一種の「愛の宮廷」ともなり、騎士道的愛と清新体派詩人たち (stilnovisti) の伝統が実施されたであろう。彼らがボッカッチョの名を思い出しても不思議ではない。『デカメロン』に描かれた愛の冒険譚とこれを語る男女の語り手は自分たちのように思えたろう。(1)

当時の若者文化を知るには、社会のしきたりや構造の違いを先ず考慮しておく必要がある。フィレンツェ社会を構成する人口の大部分が、今日ならハイティーンと呼ばれる世代以下で占められていたことは、現代の日本社会と対照的である。彼らには婚姻や職業・公職による緊密な関係だけでなく、宗教生活上の深い絆も存在した。名付け親のしきたりや、同一の教区教会に通ったり、信心会 (compagnia) に所属したりしておこなう諸活動は後者の例である。特に一般信徒からなる信心会はフィレンツェ市民の祈りと奉仕の場であり、同市の守護聖人、洗礼者ヨハネ（ジョヴァンニ）の祝日（六月二四日）などの特別な日に向けての準備は、これを通して実施された。一四九二年にロレンツォの遺体にサン・マルコの礼拝堂からサン・ロレンツォ教会の聖具室にしめやかにつき添うのは、サン・パオロ信心会、通例マギ（東方三博士）のコンパニアと呼ばれた会の同僚たちである。このように彼らは多重的・聖俗的に結ばれており、これが人間関係を確固たる繋がりにした。カルネヴァーレの時、彼らの陽気な輪は最高潮に達した。仲間の間から大将 (messer もしくは signore) を選び、集団が統轄され、彼からお仕着せの支給を受けた。十代後半を迎

えたメディチの長男は紛れもなく若い年齢層の中心人物のひとりであった。

ここに紹介する手紙は、フィリッポ・コルシーニからピサで学習中のロレンツォに出された雪合戦についての一文で、ルネサンスの青少年の生態をよく伝えている。先のマルテッリからの手紙のトスカーナ方言と違い、ラテン語で書かれている。ラテン語が聖職者や学者などの専有であったのでなく、場合によっては日常の生活描写もできる言語であることを示す、貴重な史料である。この年は、珍しくたくさん雪が降ったため、気晴しの機会には事欠かなかったブリガータにも、一味違う遊び場ができあがったことになる。非日常的な空間であったため、この体験は参加者や見物客にとり、忘れ難い一夜の出来事となり、長く語り草ともなったろう。

「私があなたに手紙を書いていた間も、ほぼ町全体が雪で被われていました。これがある者たちには退屈極まりないことでしたが、ほかの者たちには運動と気晴しになったと分ってほしいですね。特に信じ難い楽しみには、実際我が都市国家の最も目を惹く面々、ロッティエーリ・ネローニ、プリオーレ・パンドルフィーニ、バルトロメーオ・ベンチがいたのでした。果たして彼らはこれを願ってもない機会到来と、記憶に残るに似つかわしい何か重大なことを演ずることで一致しました。そのため夜の第二の時刻頃(夜の十時位か)、マリエッタ・ストロッツィ邸にたくさんの群衆ともども—彼ら市民は至る所からそこに流れ込んできたんですが—現われました。つまり、大雪合戦をするために、雪を投げたり受けたりする準備をしまして。だから彼らは先ずその少女と雪を分け合いました。不死の神々よ、何という舞台でありましょう。と言うのは、それが絢爛さと無数の松明の光輝さ、嘲嘲たる喇叭の響き、そして快い笛の音で整えられていたからなんです。でも私がその夜この目でしかと見たことを私の粗雑な文言では摑み切れないのではと心配しています。だって変りゆく場面ごとの熱狂について、限りない拍手についてどう言ったらよいのでしょう。私のロレンツォよ、言葉で摑み切れないのなら、手短にさっと済ますことを許してほしいものです。彼らのうちめい

めいは、雪白の少女の顔ばせを雪で濡らせたなら、自らが何か名誉あるものを手に入れたと考えていました。このすべてが雪の競技でなくて、むしろ標的を睨む射手の戦いだったと言ったがいい位、彼らは非常な栄誉心で戦いました。実はその娘こそが、皆によく知られている綺麗さからとは言いたくありませんが、その合戦ににおいて優美さ及び巧みさを示すことに最も力を発揮してとても立派に振舞いましたので、彼女はみんなから尊敬され賞賛されて、退いた程でした。しかしあんなに惜しみなく競技した当の若者たちは、彼女に相応しい贈物をしないでは去るべきではないと思っておりました。それぞれがとても満足したことが明らかになって、これは終わりました。従って以上が、書いている間、あなたが喜んで読むことが分かっているから、このためにあなたに知らせるべきだと考えた出来事なのです[2]」

この手紙は、フィレンツェの暦では一四六三年、今日のそれでは一四六四年（当時フィレンツェでは三月二五日が新年の始まり）の二月のものである。差出人のフィリッポはロレンツォの生涯の友であった。マリエッタはこの時、十六歳。十八歳で嫁ぐことが理想とされたが、二十で独身なら「蓋が立った乙女」と見られた社会では、うら若い女性は実に微妙な年齢のバランスの中にある。雪の女王は結婚適齢期にあった。フィレンツェの雪はやがていつか消えてゆこう。愛らしい少女の容貌にもいつしか年輪が刻まれよう。ヴァザーリが伝える、デシデーリオ・ダ・セッティニャーノによる彼女の頭部肖像が現存している。数多くの著書を残した博識な研究者、デル・ルンゴはこの雪物語にポリツィアーノのラテン詩の一節を書き添えている。「乙女よ、あなたは雪そのもので、雪と戯れている。遊び戯れよ。だが真白き輝きが消え往く前に、その形が溶け往くようにせよ。[3]」艶ある輝きは女性の若さだけに限らない。彫像の作者デシデーリオは二八歳の若さで、奇しくも同年一月にこの雪を見ることなく当地で世を去った。

名門ストロッツィ一族（一五世紀前半にはおよそ三十家から成る強力な一門。ヴァローリ家とこの数は対照的であ

る）の出である彼女の祖父は、ヒューマニズム文化をこよなく愛した著名な文化人パッラ・ディ・ノフリ・ストロッツィであった。亡命前フィレンツェで最も豊かな市民のひとりであった。しかし、コシモに政争で敗れて一四三四年にフィレンツェから北伊パトヴァに追放され、六二年に亡くなった。時に九十歳、天寿を全うしたと言ってよかろう。異郷の地で彼のストア的教養が無聊と不運とを慰めて止まなかったと言う。政敵コシモは彼の二年後、夏の盛りに死去した。問題の手紙が書かれた年は、この年の初めであった。両家の和解は彼らの生前には成立せずに終わっている。

フィリッポ・コルシーニの表現からは、一見、雪合戦が気紛れな天候から降ってわいたような印象を与える。だが、別の史料からは、これが計画的であり、そこに雪が落ちてきただけと考えるのが自然であることが判明する。確かによく読めば舞台が手際よくできすぎている。消えゆく雪のため、一刻の猶予もままならぬとは言え、時はカルネヴァーレの季節であったことは注意されるべきである。するとこれはまた、その数日後にバルトロメーオ・ベンチがマリエッタのために企画したアルメッジェリーアの一環であったことになろう。そこでは彼は彼女に恋している役を演じ、この女性（dama）からより一段の好意を獲得することを希望する。市当局は、その夜、練り歩きに関わりある道筋に交通規制を敷き、模擬戦参加者を除いて馬での乗り入れを禁ずる御触れを出している。

現実の歴史は必ずしもロマンティックではない。バルトロメーオは実際にはマリエッタと結婚しなかったし、彼女の結婚した年も十八ではなく、雪のスポーツから七年も経っていた。結婚が遅れた理由は、彼女の家の事情によると思われる。彼の結婚は彼女の翌年、一四七二年であった。それでは極めて現実的なものであろうか。歴史家トレックスラーは、ロマンティックな出来事の背後にストロッツィ家の名誉回復の手がメディチ家及びその周辺の一党から差し伸べられている、と推測する。[4] ベンチ家はメディチ銀行との関係が密接で、特にジョヴァンニ・ダメリゴはコシモ・デ・メディチを助けた有能な経済人として知られる。コシモの長子ピエロの妻、つまり我々のロレンツォの母は格式

高いトルナブオーニ家の出身であった。そのトルナブオーニ家のリーサベッタがバルトロメーオの花嫁として来た。ロレンツォのためにオルシーニ家からの嫁探しにローマで活躍したのは、そのトルナブオーニ家の兄弟であった。

この時点で果たして当のメディチ家からはいかがなものか。コシモ没後、三十年に渡る同体制への不満がメディチ体制転覆運動へと進んで行く。同家が頼りにしたミラノ公フランチェスコ・スフォルツァの死は不安定要因であった。だがそれが未遂に終わると、子のピエロはロレンツォともども同家安泰を図る。ストロッツィ家は、その一連の過程の中で設置された、一四六六年九月二十日緊急特別権限委員会（バリア）の議決で復権を果すことになる。同家の者のうち、マッテオ・ディ・シモーネ・ストロッツィの流れを汲む血統はフィレンツェに戻ってくる。彼の妻は有名なアレッサンドラ・ディ・フィリッポ・マチンギで、不運な時代に書かれた彼女の子供たちあて書簡は、この間の経緯を知る上での貴重な第一等の文献である。この書簡は検閲されなかった。[5] 彼らの間にできた長子フィリッポがロレンツォ・デ・メディチにより外交上不可欠の人物と政治的に判断されて、実に三十年余りを経て両家の歩み寄りが可能になったのである。この一統は南伊のナポリのアラゴン王家に太いパイプを築き、厚い信頼を勝ち得ていた。マリエッタへの流れ、つまりマッテオの従兄弟に当たるパッラの血統は北伊ヴェネツィアに移住しており、別の歩みを始める。彼女の結婚した相手は北伊のフェッラーラ人であった。

ストロッツィ家を見ていると、同姓とは言え、中世的な閥族帰属意識が変化して、本流正統意識が育くまれていく様子が窺われる。歴史の時間が長くなり、世代が数多く交替するに連れて、共通の先祖は段々遠くなるであろう。フィリッポの弟、ロレンツォは実は美貌のマリエッタに激しく恋をし、結婚を望んでいた。これに反対したのは復権を果したその兄自身であった。反対した理由は幾つかあるが、六五年に彼女の母のアレッサンドラ・バルディが死去して、両親のいない、幾分蓋の立った娘になっていることや、同じくその年叔父のジョヴァンフランチェスコが借金を

拵えて出奔してしまったことが障害となった。同族一門とは言え結婚が可能なくらい両家が隔たってきたことを物語る一方で、社会的に指弾されている遠縁の者と同族間の繋がりを深め直すよりも、有力一門と新たな血縁関係を作り上げる方が得策との意識が、ここには働き始めている。ロレンツォは結局七十年にバロンチェッリ家の娘を嫁にした。これはアラゴン家のフェルディナンド（フェッランテ）の取りなしにより成立し、サン・ロレンツォ教会での式にはメディチ家のロレンツォも列席した。[6] この教会はメディチ邸に近接しており、同家の菩提寺といった性格を強めて行く。結婚後間もなくしてロレンツォ・ストロッツィはナポリに戻り、そこで七九年に死去した。

代りに七十年にフィレンツェに入ってきたのは、兄フィリッポであった。母との生活は翌年、彼女の死によりすぐに断ち切れてしまったものの、彼は有力者として同地に欠かせない人物となった。二度結婚し、九一年に亡くなる迄に数多くの子に恵まれた。男子の末子、父と同名のフィリッポはメディチ本流のクラリーチェ・ディ・ピエロ・デ・メディチと結婚する。彼らの経済力はたいしたもので、『ガルガンチュア』の作者、ラブレーにはキリスト教社会の中の最富豪に思われた。だが所詮、ストロッツィの帰還は彼らの勝利でなく、メディチの得点に加えられる。ところで父フィリッポからの流れはかなりの直系意識を持とう。十四世紀にはメディチ家などを始めとして有力市民の間には必ずしも本家意識などなかったようだ。それは十五世紀の後半に意識の上で明確化し、やがて決定的になった。コシモの父、ジョヴァンニ・ディ・ビッチに遡り、これからの流れがこの自覚を培っていった。そしてフィレンツェ社会の中で必ずしも旧家の部類に入らなかった一族が、その部類の家門と婚姻を重ね、しまいにはこれを求められる迄に成長した。十六世紀以降のフィレンツェは貴族社会へ変貌を遂げ、かつての豪商たちはフィレンツェの市民としてでなくメディチの廷臣として生きることになる。[7] だがそれは、子フィリッポに見られるように平坦なコースでは決してなかった。

註

(1) I. del Lungo, *Gli amori del Magnifico Lorenzo*, Bologna, 1923, 29–42.

(2) Firenze, Archivio di Stato, Carte Strozziane, serie III, filza 103, c. 72. P. O. Kristeller, Un documento sconosciuto sulla giostra di Giuliano de' Medici, in *Studies in the Renaissance Thought and Letters*, Roma, 1956, 449.

(3) I. del Lungo, *La donna fiorentina del buon tempo antico*, seconda edizione, Firenze, 1926, 250.

(4) R. C. Trexler, *Public Life in Renaissance Florence*, New York, 1980, 230.

(5) 二つの新旧の版がよく知られている。Alessandra Macinghi negli Strozzi, *Lettere di una gentildonna fiorentina del secolo XV ai figliuoli esuli*, Firenze, 1972 (1877). Alessandra Macinghi Strozzi, *Tempo di affetti e di mercanti, lettere ai figli esuli*, Milano, 1987. 前者（A・M・n・S と略する）には C. Guasti による序論と詳細な註釈が、後者（A・M・S と略する）には A. Bianchini による今日の観点から書き下ろされた序文、文献目録、索引が付いており、ともに重要。彼女も必要に応じて人物をアラビア数字で表わす。近年「商人作家」の日記や覚書がフィレンツェ社会の理解に欠かせないことが認識され始めているが、彼女の書簡も改めて読み直される価値がある。ルネサンスの意義ある言語表現がすべて学識豊かなヒューマニストによってなされ、古典的形式と伝統を踏まえた文学であったとしか見ないなら、この時代に対する甚だしい誤解である。拙稿「イタリア・ルネサンス期の日記—西欧の古記録の語るもの」（『日本歴史古記録総覧』新人物往来社、一九九〇［一九八九］年）二〇一—二〇六頁。最近のストロッツィ研究から次の書を挙げて置く。H. Gregory, "A Florentine Family in Crisis: The Strozzi in the 15th Century" (Ph. D. diss., London University, 1980). L. Fabbri, *Alleanza matrimoniale e patriziato nella Firenze del Quattrocento. Studio sulla famiglia Strozzi*, Firenze, 1991. M. M. Bullard, *Filippo Strozzi and the Medici. Favor and Finance in Sixteenth-century Florence and Rome*, Cambridge, 1980.

(6) A・M・n・S, 547–552, 589–97. A・M・S, 290–93, 314–15.

(7) ルネサンスの系譜意識については、拙稿「西欧社会における系譜」（『日本姓氏家系総覧』事典シリーズ一一、新人物往来社、一九九一年）四五二頁—五四頁参照。

二　馬上槍試合とルクレツィア

ロレンツォ・デ・メディチの初恋はルクレツィア・ドナーティに捧げられている。友人のポリツィアーノ(*Le stanze per la giostra*)やロレンツォ伝の作者、ニッコロ・ヴァローリによれば、彼女はロレンツォのミューズ神であった。ドナーティ一族は当地では中世以来の懐かしい名である。先祖のコルソ・ドナーティはダンテとの対立で名高い。母はマリエッタと同じくバルディ家の出である。バルディ一族も亦古くからの家柄で、大商人として有名だった。因みにロレンツォの祖母、つまりコシモの妻も同家の出身である。ルクレツィアはマリエッタのように美しいフィレンツェ女性であったろうが、残念なことに、彼女であることを保証する芸術作品が残っていない。強いて挙げるなら、ヴェロッキョの手になると見られる、ある無名の婦人像(『小さな花束を持つ婦人』*La dama del mazzolino*、バルジェッロ美術館)がそうかも知れない。だが彼女が永遠の像を結ぶのは言葉の世界においてである。詩人ウゴリーノ・ヴェリーノ(*Flametta, ad Laurentium Medicem*)によるルクレツィアの全身像の描写によって、そしてなによりもロレンツォ自身の愛の表現によって。

ルクレツィアは一四六五年の春四月に、ニッコロ・アルディンゲッリと結婚した。婚約期間は二年間あった。アルディンゲッリ家も一四三四年にコシモによりフィレンツェから追放されたため、夫となる人が成長したところはナポリだった。ニッコロはレバント(東方)貿易業者であり、イタリアとトルコ方面を往来し、家を空けることも珍しくなかった。式後もすぐに「金を稼ぐために」フィレンツェを去った。二人の間には四人の子ができた。妻は一五〇一年に世を去り、サンタ・トリニタ教会に葬られた。夫はその五年前に死去していた。この教会のサッセッティ礼拝堂にはロレンツォの有名な壁画があることで知られ、ドメニコ・ギルランダイオの手で、その生前に描かれている。

ロレンツォとルクレツィアの関係に度々言及しているアレッサンドラ・ストロッツィは、ナポリにいる息フィリッポにあてた手紙（一四六五年三月二九日付け）で、結婚を控えたニッコロ・アルディンゲッリのフィレンツェ市滞在允可に関し、次のように言う。これはジョヴァンニ・ルチェッライ（妻は前述のパッラ・ストロッツィの女子。三四年に追放された人たちに同情的であったが、メディ家とも関係を深めていく）が、ロレンツォの父ピエロに願ったこともあるがとしたうえで、ロレンツォがニッコロの彼女に（alla suo' dama e donna）気に入ってもらうために、動いた可能性を示唆している。そして美しい妻を持つことはアラゴンのフェルディナンドの懇請よりも役に立つと皮肉っている。[1] これは、ナポリ王家が追放されたストロッツィ家を思い、メディチ家に対して取った行動を指している。また、ニッコロが商売で八千フィオリーニ稼いだという噂を聞き付けていた彼女は、翌年二月七日付けの同じ息子あての手紙で、そのため彼があなたに借金を返すだろうと言いながら、彼の妻に関する情報を添える。三日にサンタ・マリア・ノヴェッラ教会の教皇の間では、ロレンツォとその仲間が彼女のために舞踏会を開いた。彼女は大きくて綺麗な真珠を身に付け、彼らは彼女の見立てたお仕着せ（livrea）を装っていた。大変な金額になろうが、それだけ稼いだからパーティがやれたのだと。[2]

ロレンツォと彼女の関係については文学の対象ともなり、友人たちは若い二人を詩の題材として取り上げる。一四六九年二月七日の馬上槍試合（ジョストラ）を謳った、友人ルイジ・プルチの『ジョストラ』（*Giostra*）は、そのような作品の中でも最もよく引用されているものである。この短詩と作者不詳の史料などから、試合については再現され得る。[3]

この試合に先立つこと三年前の春一四六六年に、ロレンツォの最も気の置けない友人、例のブラッチョ・マルテッリがコスタンツァ・デイ・パッツィと結婚式を挙げた。開かれた祝宴にロレンツォとルクレツィアの姿があった。馬

上槍試合の話になり、ルクレツィアは夢中になり、ロレンツォの意中の女性（dama）は彼に花輪（grillandetta）を与え、昔の馬上試合を甦らせるように頼んだ。これに対し、ロレンツォは彼女に敬意を表して催し物を開く約束をした。その時政治的状況はジョストラの開催に不都合であり、父ピエロは反対した。しかしやがて平和が戻り、こうして開かれることになった。場所はサンタ・クローチェ教会前の広場。参戦する者の数は、十五人を越していた。勝負の判定を勤めた一人はロベルト・ダ・サンセヴェリーノで、名高い傭兵隊長（コンドッティエーレ）である。この人は後にプルチのパトロンになった。

このような戦闘試合においては、前述したように、試合前のアルメッジェリーアも重要であった。その華やかな騎馬行進は社会的な意味を持ち、メディチ家の力を誇示する絶好の機会であった。そのためかなりの費用がかけられた。ロレンツォもこのことをよく知っていて、自ら書いた『リコルディ（備忘録）』に以下のように記している。「他の人たちがしたようにするために、私はサンタ・クローチェ広場で、多くの費用をかけてまことに豪華に馬上槍試合を開いた。我々はおよそ一万フィオリーニを使ったと見ている。[4]」この費用の額には個人の衣裳代が含まれていず、実費とはだいぶん異なっている。

めいめいの競技者は喇叭手、小姓などに引き連れられていた。ロレンツォの入場が喇叭で告げられると、小姓の一人が主を戦場へ案内すべく姿を見せる。彼はこの晴れ舞台のために特別にヴェロッキョ描く一旒の旗を掲げていたが、その旗には上方に太陽が下方には一条の虹が描かれ、ロレンツォの座右銘、「時は戻れり」（Letens [Le tem〈p〉s] revient）は真珠でもって表わされていた。これは時は還り、世紀は更新されるという意味である、とプルチは説明している。[5] ウェルギリウスの『牧歌』（*Eclogae*）の有名な一節を踏まえているこの言葉は、中世人を魅了したことで知られる。一例を挙げれば、ダンチの『神曲』煉獄篇の第二二歌であろう。そこではスタティウスが、ダンテを案内す

る大詩人ウェルギリウスに向って言っている。「君ゆえに私は詩人となり、君ゆえにキリスト教徒となった」と。ただここでは、キリスト教到来の予言としてよりも、古典古代が復活し、黄金時代が始まるような響きがある。後にロレンツォは『愛の詩林』(*Selve d'amore*)で、更に旧い、プロメテウス以前の黄金時代を謳うであろう。今一度旗に戻ろう。その中央には、金白で刺繍された花衣裳を身に纏う婦人の姿があった。ルクレツィアであろう。彼女は月桂樹の緑の葉と枯れた葉を編んで飾りを作っていた。この植物はロレンツォ自身の個人的な意匠であった。月桂樹(laurus, lauro)はロレンツォのラテン形、Laurentius に通じていて、栄えある冠を意味しよう。弟のジュリアーノのジョストラ(一四七五年)を謳ったポリツィアーノの有名な一節には、「なんじ、立派に生まれしラウル、その被いのもとでフィレンツェは楽しく平和に憩う…」(I、4)とある。

いよいよロレンツォが十二人のフィレンツェの若者を従えて入ってきた。それからジュリアーノも。弟も同じ格好であったが、兄の黒ビロードの帽子には宝石とルビーが散りばめられ、金糸の羽根飾りが付いていた。陣羽織の上に彼が羽織った肩掛けにも、真珠で表現された例の座右の言葉が縫取ってあり、そのまわりには花弁が開いたのやら、或いは閉じたままの薔薇が刺繍してあった。盾の紋章には、金色に輝く三本の百合が青地に浮んでいた。百合の花(fleur-de-lys)はフランス王家の紋章であり、父ピエロに王ルイ十一世からメディチ家に付与された特権であった。それは一四六五年に、主として今は亡きコシモの生前の徳を讃えて、使用を子々孫々迄許したのである。[6] フランスと同家の親密な関係を示す事例であるが、これはやがて同一族から二人の女性が王家に輿入れする前触れのようである。その中央にはリブロ(libro.書物の意)として知られる同家の大きなダイヤモンドが光を放っていた。その値打ちは三千ドゥカーティと見積もられていた。

飾り馬具が付けられている、打ち跨がっていた馬はナポリ王フェルディナンドから、身を固めた具足は、ミラノの

武具師の手になり、ミラノ公爵ガレアッツォ・マリア・スフォルツァ（前述のフランチェスコの子）から贈られたものであった。それぞれはその地の特産品である。これは入場の際の出立ちであった。戦闘に当たっては、先の帽子を脱いで三枚の青い羽根を載いた兜を被り、馬はフェッラーラ侯ボルソ・デステから贈られた突撃用の軍馬に変えた。馬好きのロレンツォは常に良馬を求めていた。人馬一体の逸話には事欠かない。馬が良かったのか。戦績は先に引いた『リコルディ』に続けて書いている。「私は武器の使い方にも打撃の加え方にも特に長じてはいないが、一等賞が私に与えられた。それは軍神マルスの像を前立てに持つ、銀がはめ込まれた兜であった。」後に書かれたとは言え、あの時の昼日中の興奮とは打って変わって、ロレンツォの冷めた筆致が窺われる。プルチは彼の見事な腕前が武人オルランドや英雄アキレスの功業に張り合うとしているのだが。彼は幸いに優勝することができ、ルクレツィアへの約束を無事に果した。試合の間彼女は不安そうに見つめていたが、汗だくの戦闘者のもとに来、固く手を握った。「今あなたは、ラウロよ、新たな花々からなる似つかわしい花輪を手にす」と、プルチは謳う。

この馬上槍試合は、マルテッリの結婚祝いという意味合いは薄くコレオーニ戦争などの混乱が収拾されて、フィレンツェに平和が戻ってきたことや、ロレンツォの婚約を祝うことが目的であったろう。婚約の成立が前の年の六八年十二月で、ローマにいる婚約者クラリーチェ・オルシーニは、この試合のことを知っていた。そして彼女が戦いを心配して無事を祈っていたことや、また勝利に喜んだことを知らせる手紙が残っている。ロレンツォの勝利は既定のものであったかも知れないものの、馬上槍試合が危険を伴わない全くの遊びともいえなかった。遠くにいる彼女の心配が愛の発露であったかどうかは断言できないが、身近な存在になった人への素直な気持の表われと受け取りたい。

ロレンツォはフィレンツェに迎えたクラリーチェにルクレツィアを幼なじみの友人として紹介したことであろう。一四七一年、ルクレツィアとニッコロ・アルディンゲッリに最初の子、ピエ（ト）ロが誕生した。そこでこの赤ん坊

のために五人が代父と代母の役（parte de' conpari e chomari）を引き受けているが、その中にフィリッポ・ストロッツィとともにロレンツォの madonna、クラリーチェの名が見出される。家族同士の交際が偲ばれる。[7] アルディンゲッリ一族にも、ストロッツィ一族と同じく長い追放令が取消されていた。その取消の条件は異なっていたものの、ピエトロは長じて、メディチ出身の二人の教皇、ロレンツォの次子に当るレオ十世と甥に当るクレメンス七世の秘書となった。

さてプルチが『ジョストラ』を書き上げたのは、試合から六年後のことである。それまでにロレンツォ夫妻の間には何人かの子女が生まれていた。作品中に、ロレンツォの意中の人がルクレツィアであったことをクラリーチェに隠そうとする意図は見えない。ここには現実社会とフィクションの不接合が明瞭に現われている。商人社会に楽しみとして定着している騎士道精神は作者を本格的な儀礼世界へ連れ戻すようでいながら、市民生活の日常性が頭をもたげて来て、宮廷風恋愛が家庭生活に取って替わる。プルチは好んでフランス的な宮廷風恋愛の世界を描き、その世界に二人を投影した。貴婦人と彼女に思いを寄せる若い独身の騎士は、孤閨を守る若い妻ルクレツィアと独り身のロレンツォである。しかし家族同士が現実に交際をしている市民生活の場に中世的儀礼を導入した、表面的な模倣に終わっている。これは決して封建世界の規定に叶った愛ではない。中世の恋愛規制によれば恋は見抜かれてはならなかった。ダンテの『新生』にもあるように、真実の愛は秘められなければならない。確かにロレンツォは自らの作品のどこにも実名ルクレツィアを出さない。一見隠しているように思われる。だがその詩の中にディアナ（Diana）があれば、それがドナーティ（Donati）家の彼女を指すことは周知の事実であった。[8] そのルクレツィアが不貞な妻であり、クラリーチェが夫と彼女の友情に嫉妬したといった史料は皆無である。

騎士道社会で広まった宮廷風恋愛は、南フランスで生まれたトゥルバドゥールの至純の愛が出発点とされるが、制

度も恋愛観もともにイタリアに入ってきた。アルプス以北の封建社会から導入された騎士制度が、当地で、特に自治都市フィレンツェでどのような変貌を遂げたかに関しては、サルヴェーミニの古典的研究がある。彼によれば、コムーネ成立時には封建戦士的性格が込められていた騎士叙勲の制度も、やがて商人層に広がり、騎士号は戦闘行為からは切り離された一種の肩書、名誉称号に変ってしまった。広義の意味での貴族の称号問題は、紋章等を含めてルネサンスにはまたそれ自体独特の展開を見せるように私には思われるが、彼の筆は十五世紀には及んでいない。著者は最後に、同じプルチの『モルガンテ・マッジョーレ』が、『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』の直接の先祖と言い、その制度の終焉を告げている。(9) 形骸化とは言わないが、真似事の喜びは残ったのである。騎士道世界に咲いた宮廷風恋愛の道もイタリアで模倣されたが、やがて内面的な恋愛感情が清新体派の詩人たちを中心にして吐露され、豊饒な文字世界を築いたことは西欧文学史の一大出来事であった。そこでは愛は哲学的・分析的に扱われる傾向が強かった。この伝統はペトラルカでひとつの頂点に達するものの、十五世紀に入ると六十年代からフィレンツェで本格化するプラントン主義的愛の観念と溶け合い、ロレンツォなどに影響を及ぼす。

フィレンツェの豪商たちが北方の儀礼や文化を好んでいた点に関心を持ち、この事実を重んじた研究者にワールブルクがいる。彼は、例えば「フィレンツェ版画に見える愛のモットー入り図案」という論文で、衣裳表現に着目する。かつて「愛の箱」或いは「香料用器」の壺上にあった、一枚の版画（バッチョ・バルディーニ作か。今日一般的にはオットー・プリントと呼ばれる。図版参照。パリ国立図書館）には、流行りの中世「パリ風」モードに身を固めた若者が見られるが、これは彼らの嗜好を表わしている。と言う。画中には「愛は誠実を欲する。そして誠実がないところに、愛はありえない」(amor vuol fé e dove fé nonnè amor non può) という銘が読める。そしてこの銘文を持ちながら両脇に向い合うカップルがいるが、この二人はロレンツォとルクレツィアでないかと彼は推理した。それは

必ずしもロレンツォの横顔を伝えていないものの、その若者が纏っている礼装服は明らかに誰であるかを教えようとしている。それは太腿に達し、ゆったりした袖口からは直角に折られた彼の右手が伸び、彼女とともにその言葉の書かれた布（紙?）巻状の一方を握っている。刺繍が施された彼のその袖側に三枚の羽根付きの指輪が見える。これはロレンツォの個人的な図案として有名である。駝鳥の羽根を用い、信仰、希望、愛を表わす白、緑、赤の色をしていたが、ここでは分からない。ワールブルクは流行服を装った若者に対し、女性の身作りに古代風の兆しを読み取る。ニンフの出で立ちの彼女は、早、ボッティチェッリの世界を告げている。ここに装いを通して時代の転換を想定し、その転換期は作品制作の、一四六五年に置かれている。これは拙論が扱った年代の頃に重なり、興味深い。[10] 先に見たように、メディチ家の新たな政治的勝利が決定したのは六六年であった。

この拙論では、騎士道精神の横溢するブリガータの市民的遊びを幾つか取り出して、社会生活の一端を垣間見てみた。雪合戦にしろ、馬上槍試合にしろ、形式化が進み、様式美すら感じられる。自然界のスポーツも人工美の世界と融合されている。プルチのジョストラも、無名の著者の手になる、十五世紀前半のジョストラと様相を異にする。一四〇六年のピサ占領以後、フィレンツェ人はサン・ディオニジの祭（十月九日）にパリオ（競馬レース）を催していたのだが、やがて代ってジョストラを行なうに至った。未知の作者の詩は戦いがより厳しく、また作詩の動機が真剣な愛であることを伝えている。[11] 二人の個人的資質に帰せられない、時代の相違が感じられてならない。

註

（1） A・M・n・S,385-86. Guasti, *ibid.*, 389, はニッコロの彼女をルクレツィア・ゴンディとしたうえで、ロレンツォには恋人、ルクレツィア・ドナーティがいながらといった趣でこれをスキャンダルと見ている。そして結婚するや、ニッコロはレヴァントに戻ると丁寧に付け加えている。この間違った混同については、すでに、Rochon, *op. cit.*, 129 n 348' がデ

ル・ルンゴにより訂正されたと指摘している。Del Lungo, *Gli amori*, 57-59. これは元来、一九一三年の *Nuova antologia* に出た。ところが、新版の A・M・S, 212 の註も、依然としてこの彼女がゴンディ家のルクレツィアとしている。ところで、A. Warburg, Delle "imprese amorose" nelle più antiche incisioni fiorentini, in *La rinascita del paganesimo antico*, Firenze, 1970 (1966), 185-86、では既に G. Poggi が、その誤りを指摘しているとしている点に注意。この論文は元来、G・ポッジの訳により一九〇五年の *Rivista d' arte* に出た。

(2) A・M・n・S, 575. A・M・S, 307.

(3) *Ricordo d' una giostra fatta in Firenze il febbraio 1468 sulla piazza di S. Croce*, a cura di P. Fanfani, *Borghini*, II, agosto-settembre 1864, を見ることが出来なかったため、諸書に頼った。

(4) *Ricordi del Magnifico Lorenzo di Piero di Cosimo de' Medici*, in W. Roscoe, *The Life of Lorenzo de' Medici called the Magnificent*, London, 1797, vol. I, Appedix, N. XII., 28. この時代の貨幣が今日ならどの程度の通貨価値を持つかを見極めるのは困難であるが、当時暮らすのに必要な年間生活費は十五フィオリーニ足らずあったと考えられている。本文のあとに出てくるドゥカートは、ヴェネツィアのドージェ（ラテン語ではdux）像が刻まれたことに由来する。十六世紀の史家・文学者のベネデット・ヴァルキに言わせると、フィオリーノもドゥカートもスクーディも同じで七リラに相当し、一リラは二十ソルディの価値を持っていた。ロレンツォの時代は一フィオリーノは百ソルディを越し、百三十ソルディまで達したが、ヴァルキの若い時代は百四十ソルディで安定していた。R. A. Goldthwaite, *The Building of Renaissance Florence. An Economic and Social History*, Baltimore, 1980, 429-30.

(5) Luigi Pulci, *Ciriffo Calvaneo di Luca pulci Gentiluomo fiorentino. Con la Giostra del Magnifico Lorenzo de' Medici. Insieme con le Epistole Composte dal Medesimo Pulci*, Firenzn, Giunti, 1572. P. Ceccarelli, Le feste fiorentini orientali e neoplatoniche, in *Lume del sole. Marsilio Ficino medico dell' anima*, Firenze, 1984, 104, からの引用による。このチェッカレッリの論文は、この騎馬槍試合の演劇的空間に多くの象徴を見出し、刺激的である。『ジョストラ』はかつて、兄のルーカの作と看做されていた。この有名な場面はロレンツォ関係書なら必ず叙述するところである。E. Barfucci, *Lorenzo de' Medici e la società artistica del suo tempo*, Firenze, 1945, 175. L. Becherucci が目を通した第二版では157.

(6) Angelo Fabroni, *Laurentii Medicis Magnfici Vita*, Pisis, 1784, II, 117.

(7) Warburg, *op. cit.*, 191. 翻訳者ボッジが補足の史料を挙げている箇所。

(8) Rochon, *op, cit.*, 146.

(9) G. Salvemini, *Opere* I. volume II, *La dignità cavalleresca nel Comune di Firenze e altri scritti*, a cura di E. Sestan, Milano, 1972, 169. 私なりに言えば、モルガンテは子にガルガンチュアを、孫にドン・キホーテを持つ。フィレンツェに限定しなければ、イタリアでは騎士道物は世紀を越えて好まれ、傑作が生まれたことは言うまでもない。シャルルマーニュ伝説の愛好者プルチのルネサンス文化、とりわけ時代の「新」文化、プラトン主義との関わりについては、霊魂不死を巡るフィチーノとの論争がよく知られている。ロレンツォ・デ・メディチをプルチとフィチーノの間に見る観点については、前掲拙稿「ゲーテの不死性思想とイタリア・ルネサンス」、二七二頁。E. Garin, La letteratura degli umanisti, in *Storia della letteratura italiana.* Nuova edizione accresciuta e aggiornata diretta da N. Sapegno, Milano, 1988, 500–509.

(10) Warburg, *op. cit.*, 183–184. ワールブルクは彼らの装いを、アレッサンドラ・マチンギ・ストロッツィの手紙にあった舞踏会の身なりと重ねている。彼の説は、Del Lungo, *op. cit.*, 66–7, が全面的に受け入れている。ここでのモットー（その一節はプルチの詩にも出つ）はイタリア語であるが、先の本文中の「時は戻れり」はフランス語である。何故フランス語であるかは前から気になっていたが、フランス趣味の流行の一端と捉えていいのかも知れない。

(11) G. Volpi, Un' altra giostra fiorentina descritta in ottave, *Erudizione e belle arti*, anno IV, fasc. IX (1898), 1–7.

追記。拙稿の印刷中、亀長洋子「中世後期フィレンツェの寡婦像—Alessandra Macinghi degli Strozzi の事例を中心に」（『イタリア学会誌』四二、一九九二年）八〇頁—一〇四頁、が出た。法的見地からこの期の寡婦像に迫り、アレッサンドラ・マチンギの寡婦生活の一端が知られる。

（ねじめけんいち　本学助教授・人文学科文化史研究室）